翻　訳

ワルシャワ蜂起と国内軍総司令部
――蜂起最終決定の背景――（2）
（D）国内軍総司令部参謀総長タデウシュ・ペウチンスキ中将との会談覚書
Interview with Gen. Tadeusz Pełczyński, the Chief of Staff of Polish Home Army

ヤン・M・チェハノフスキ
Jan M. Ciechanowski
（渡辺克義　訳）
（trans. by Katsuyoshi WATANABE）

訳者まえがき

以下に示すのは、KG AK 参謀総長であったタデウシュ・ペウチンスキ中将とヤン・チェハノフスキのインタヴューである（Jan M. Ciechanowski, *Powstanie Warszawskie. Zarys podłoża politycznego i dyplomatycznego*, Pułtusk 2004, s. 552-562）。会見日時は不明であるが、1960年代末であろうと推定される。ペウチンスキは戦後多数の論文・回顧を著しているが、本会見覚書がそれらと並んで、ワルシャワ蜂起勃発の背景を知る上で極めて重要な史料であることは間違いないところである。訳者は以前、J. M. チェハノフスキ「ワルシャワ蜂起と国内軍総司令部　―蜂起最終決定の背景―」『北欧史研究』（第23号、2006年）の翻訳三篇を発表しており、本会見覚書はそれに続くものである。

＊　＊　＊　＊　＊

チェハノフスキ（以下、J. M. C. と略記）：軍最高司令官のカジミェシュ・ソスンコフスキ大将が、レオポルト・オクリツキ少将を［英国からポーランドへ］派遣するに先立ち、KG AK 司令官代理に指名したのか。

ペウチンスキ（以下、T. P. と略記）：最初はそのように計画したのだが、タタル将軍がソスンコフスキ大将にオクリツキ少将はKG AK 参謀総長代理に指名するようにと進言したのであった。ロヴェツキの下ではコモロフスキが代理で、参謀総長は「グジェゴシュ」だった。「ブル」の下ではちがった。「ブル」は特定の人物を代理にすることを求めなかったのだ。したがって、参謀総長が同時にKG AK 司令官代理だった。オクリツキは軍最高司令官直属の司令部を［国内に］組織するとの使命は帯びていなかった。

J. M. C.：それについては聞いたことがある。首相ミコワイチク宛の軍最高司令官の1944年１月９日付書簡では、自身が連合国の諒解の下、ポーランドに行けるよう手配してほしい旨を述べている。この問題に関し、軍最高司令官から AK 総司令官に宛てた書簡が存在し、その回答は、ソスンコフスキ大将は国内で軍最高司令官としての職務の遂行は不可能だというものだった。

T. P.：その電報は見つける必要がある。

J. M. C.：オクリツキ将軍は連合国の対ポーランド・対 AK 姿勢、あるいは協力関係について語ったか。

T. P.：電報がすべてを語っている。KG AK は連合国に懐疑的になっていた。そのことは電報を見れば明らかだ。

J. M. C.：オクリツキ少将は KG AK に忠実であったか。

T. P.：まったく、完全にそうだ。彼は高級参謀次長であった。

J. M. C.：ポブク＝マリノフスキはサヴィツキの報告に依拠して、オクリツキがブル＝コモロフスキ中将の力量を批判的に捉えていた、と記している。

T. P.：見当ちがいだ。

J. M. C.：オクリツキはミコワイチクの政治路線に沿っていただろうか。

T. P.：オクリツキは KG AK 総司令官の見解を受け入れていた。つまり、対独戦を遂行し、ミコワイチクの対

ソ政策を実践するというものである。この問題に関しては、政府代表やKG AK 総司令官および RJN の報告に目を通されるとよい。軍最高司令官はミコワイチクに懐疑的であったが、首相として認めていた。オクリツキは我々国内の者と見解を異にしていた。オクリツキは国民民主党や PPS よりは農民党に近かった。農民党のメンバーと接触していた可能性はある。

J. M. C.：オクリツキがいる下でボクシュチャニンはどのような役割を果たしていたのか。

T. P.：ボクシュチャニンはいかなる立場も取りえなかった。決断が下せなかったが、立派な将校であった。ボクシュチャニンは1944年3月にタタルの後任となった。タタルはロンドンに飛び、作戦の指揮権をボクシュチャニンに委ねたのである。しかし、その試みは成功していない。

J. M. C.：KG AK がタタルをロンドンに送ったのは、どうしてか。

T. P.：その質問にはあとで答えよう。「ブル」と話したあとに。

J. M. C.：1943年秋にタタルが KG AK に、二つの敵を持つという案から離れるべきだと力説したというのは本当か。

T. P.：本当だ。この問題をめぐっては数度議論になった。タタルの見解が、作戦部の将校であるキルフマイエルの見解に符合することがはっきりとした。

J. M. C.：タタルとキルフマイエルは1943年秋に、ロシアへの対応について自分たちの新たな見解を明らかにしたか。

T. P.：明らかにした。タタルの論理は政策においてある程度の働きがあったにすぎない。AK の対ソ政策を宥和的なものに変えたいとして、涙ながらに訴えていた。我々はタタルの案を斥けた。我々が「左翼のスパイ」となることまで勧める者がいた。ジェペツキだっただろうか？　戦争末期においてソ連の優勢がはっきりとなるにおよんで、我々にとって良好な出口は皆無であった。状況は悲劇的だった。どの解決策もまずかったが、戦闘回避はできなかった。

J. M. C.：1943年11月から翌年７月まで、KG AK は軍最高司令官の指令・命令にどのように対処したか。

T. P.：電報を見ればわかるだろう。軍最高司令官と国内政府代表部との対立が明らかとなったので、我々は困惑した。国内においてむしろ自らで決断しなければならない、と結論を出した。1943年10月の政府・最高司令官訓令に対する我々の見解は、翌1944年１月初めにロンドンで受信された1943年11月の電報で明らかにしてある。その電報では、訓令の趣旨を改め、侵入してくる赤軍の前に我々が姿を現すと主張した。この我々の変更点は十月訓令の改正として２月にロンドン［亡命政府］で認められた。ソ連が国交を断絶した1943年、我々はポーランドの今後の運命に対する責任は国内に移ったと感じたが、ロンドンにある政権と協議しなければならなかった。

J. M. C.：ワルシャワをめぐる戦闘について貴殿自身が考慮しはじめたのはいつか。

T. P.：［1944年］７月半ばにワルシャワ戦の考えが出はじめ、決定は７月20日のヒトラー暗殺未遂事件後の21、22日に下された。KG AK はそのような決断を下した。７月22日以降、AK 総司令官はこの問題を政府代表と議論している。7月25日には決定に関して、副首相でもある政府代表と合意に達した。これ以降は、戦闘開始時期が問題となったが、その指令はほかならぬ政府代表部で発令された。

J. M. C.：ワルシャワ戦の主導者は誰か。

T. P.：その質問に対する回答は控えたい。AK 総司令官が決定を下した。彼に責任があり、私はこの点で彼を支えた。

J. M. C.：オクリツキの意見は？

T. P.：戦闘に肯定的だった。三将軍会談ではそのような意見を述べている。

J. M. C.：どのような理由付けがあったのか。

T. P.：私の理由付けについて述べたい。オクリツキは、愛国的で独立独歩の軍人としての論理を用いていた。ポーランドの立場を明確にしたいと望んでいた。

J. M. C.：前線の様子はAK 総司令官の最初の決定にどのような影響があったか。

T. P.：軍事的に根本的な影響があった。戦闘開始時期と戦術の決定は前線の状況次第だった。

J. M. C.：1944年７月20日のヒトラー暗殺未遂事件は、ワルシャワ戦の開始にどのような影響を及ぼしたのか。

T. P.：重大な影響があった。指導部で紛争があり、軍内部では分裂があり、ヒトラーの地位は事態の推移から崩壊していることを示していた。我々としては、ドイツの崩壊を含めた甚大な影響が出ると考えないわけにはいか

なかった。したがって、一斉蜂起の準備を整えるよう指令を出したのだ。ドイツの即時崩壊の可能性も見込まれたのだから。

J. M. C.：「ヴィルク」の逮捕やヴィルノのAKの幽閉は、KG AK のワルシャワ戦の実施決定にいかなる影響を及ぼしたか。

T. P.：我らが政府の決定および AK に対するソ連の敵対的姿勢が確認され、ソ連の我々に対する欺瞞が明白なものとなった。しかし、もうひとつの解釈もあった。つまり、以上はソ連側が自国の領土と見なしているところで起こったものだった。カーゾン線以西では彼らの態度が変わるのではないかと思われた。この可能性は否定しえなかった。

J. M. C.：ヴィルノの事態はワルシャワ戦を決定する上で影響があったか。

T. P.：ヴィルノ戦の実施は十分ではなく、世界的な反響を呼ぶことがなかった。しかし、この戦闘とワルシャワ戦を結びつけて捉えるべきではない。ヴィルノ戦は「嵐」作戦の一変種だった。

J. M. C.：ヴィルノでの事態は世界でどのように捉えられたのか。

T. P.：AK のこの戦闘がポーランドの見解、ポーランド軍の積極性の表明であることを世界が認知していてくれたならば！　一方で、ソ連軍がヴィルノを制圧したこと、リトアニアのパルティザンがこれ加わっていたことが報道されていた。

J. M. C.：PKWN の発足は［ワルシャワでの］戦闘決定にどのような影響があったか。

T. P.：一言で言えば、「刺激された」ということになる。

J. M. C.：戦闘を肯定的に捉える、さらなる根拠となったということか。

T. P.：そうだ。我々の戦闘にとってということだ。

J. M. C.：ミコワイチクの訪ソは KG AK に戦闘決定に影響があったか。

T. P.：日付が問題になる。それについて知ったのは［1944年］７月21日か22日だが、調べてみる必要がある。この間、我々はロンドンから打電後６時間から12時間で電報を受け取っていた。７月27日には、政府が一斉蜂起の権限を国内に委ねる旨の電報を受けた。

J. M. C.：しかし、７月25日にはAK 総司令官はロンドンに、「我々はいつでもワルシャワ戦に入れる態勢を整えている」と打電している。

T. P.：７月27日に受理した７月26日付電報で、政府は我々の７月21日付電報に回答していた。

J. M. C.：KG AK はワルシャワ戦を一斉蜂起として捉えていたのか。

T. P.:ワルシャワ戦は「嵐」の枠組で行われることになっていた。このほか、一斉蜂起の臨界態勢を敷いていた。このことは政府も認めていた。もっともミコワイチクは閣議決定を少し捻じ曲げたわけだが。一方、軍最高司令官は脇に退き、作戦面を指揮するようになった。

J. M. C.：ソ連が送った決起アピールはワルシャワ戦の決定にどう影響したか。

T. P.：作戦決定には影響はなかったが、モスクワ一派はワルシャワに入り、我々がワルシャワ戦に出ることは彼らの利害とも一致するはずだとの我々の確信に影響を及ぼした。

J. M. C.：要塞を築くために10万人の出頭を求めた７月27日のドイツ軍の指令は、どのような影響があったか。

T. P.：影響はあった。さらに厳しい指令と増派があるのではないかと考えられた。

J. M. C.：作戦開始時刻の決定に影響はあったか。

T. P.：なかった。「モンテル」が自分の部隊に自発的に指令を与えた点に影響があった。

J. M. C.：ポブク＝マリノフスキは、ブル＝コモロフスキが緊急事態発令の件で同意を得ていた旨が記されている「モンテル」の手紙を所持していると自著で記している。

T. P.：その件については、「ブル」に尋ねられたい。「ブル」はその後、緊急事態発令を撤回した。私はそのことについては知らない。

J. M. C.：街の雰囲気は決定に影響があったか。

T. P.：あった。ドイツ軍がワルシャワから撤退しているとの印象を人々は受けていた。人々には最終決起の準備ができていた。ワルシャワは、ドイツ軍が崩壊するその最終段階で戦闘を望んでいる、と我々は判断したのであった。

J. M. C.：KG AK は共産主義者が蜂起を起こす可能性について考慮に入れていたか。

T. P.：いなかった。私にとって、そのことは対象外だ。もし我々が戦闘を実施しなかったならば、［AK は］弱腰であるとの世論が巻き起こる、と私は考えていた。もし共産主義者が戦闘を起こせば、我々［AK］ではなく我々の仲間［市民、その他］が彼らの登場に力を貸したことだろう。

J. M. C.：KG AK はワルシャワ地区および同市街地におけるドイツ軍の勢力について把握していたか。

T. P.：それについては第III巻（*Polskie Siły Zbrojne*, tom III, *Armia Krajowa*, Instytut Historyczny im Gen. Sikorskiego, Londyn 1950）で示したとおりだ。東部橋頭堡の第73師団はすでに崩壊していた。同師団長はソ連の捕虜に取られていた。「ヴィーキング」とヘルマン・ゲーリングの部隊がワルシャワに入っていることは把握していた。とはいえ、これらの師団の一部でしかなかったが。第２軍の３つか４つの不完全な師団であった。装甲および歩兵の不十分な師団であった。

J. M. C.：ワルシャワに向かいつつある赤軍の軍事力については把握していたか。

T. P.：ワルシャワ制圧を任務とした最良の部隊であると我々は考えた。同軍左翼はワルシャワに達しており、同軍右翼は同じ任務の達成を目指していた。赤軍のワルシャワ制圧は時間の問題であった。このことがソ連の政治的・軍事的関心事であるからには、間違いないと私は見ていた。我々の作戦は、ソ連の全般的な作戦と連動する作戦であった。一方で、展開していた独ソ間の装甲部隊による戦闘は停止していた。

J. M. C.：いかなる戦略的条件が戦術的な決定に付随したのか。

T. P.：ワルシャワ橋頭堡へのソ連の攻撃は、ワルシャワ近郊に迫っていることを意味する。二方面での攻撃、つまり橋頭堡への攻撃とマグヌシェフからの側面攻撃があった。蜂起発生前、ソ連はワルシャワ掌握を命じていた。ロコソフスキーは、８月初旬にワルシャワを制圧せよとの指令を受けた。そのことはソ連側の史料が示している。モスクワの政治的意図にワルシャワ攻略があると我々が考えたのはなぜか。ワルシャワが、彼らが制圧を予告していた欧州最初の首都であったからだ。それは、ポーランドの解放者というプロパガンダの瞬間なのだ。ポーランド人のハートに訴える決め札となるのが、愛国的な勝利行進だ。

J. M. C.：ポーランド側が戦闘を起こさないことは政治的自殺行為と見なされたのか。

T. P.：そうだ。未来永劫続く不名誉だ。我々の参加がないまま PKWN がワルシャワに居すわるのを許すことにつながったであろう。我々は戦場の状態に苛立ったことだろう。不測の事態だった。

J. M. C.：つまり、KG AK と政府代表部は戦うことなく戦場を明け渡したくなかたっということか。

T. P.：我々のソ連に対する姿勢は、ソ連自らが引き起こしたものだった。

J. M. C.：もし逮捕が行われた場合には、KG AK はなんらかの反ソ行動を計画していたか。

T. P.：武力による防衛は計算に入れていた。武装抵抗することなく解散することは許す考えはなかった。

J. M. C.：ワルシャワ蜂起とは、スタリーンに対し、ロンドン亡命政府・政府代表部・AK への姿勢を表明させる試みだったのか。

T. P.：その質問はやや扇情的だ。しかし、スターリンがポーランドの国内外での独立をめぐる問題、独立志向に最終的にどのような姿勢を取るのかを知る試みとなる瞬間であった。

J. M. C.：では西側に関しては、どうだったのか。

T. P.:そのような性格はなかった。ソ連指導部については我々の道程で知っていた。西側は遠かった。西側はポーランド政府の一部だった。

J. M. C.：蜂起は東西におけるミコワイチクの外交交渉を容易にする試みだったのか。

T. P.：東方および中部ポーランドにおける「嵐」はすべて、政府の見解に合致していた。もしソ連が我々を根絶するつもりなら、密かに我々を捕らえ、殺すよりは、公然と我々の姿勢に対処してもらうほうが当方に好都合だった。ソ連軍がポーランドに入る時、彼らは、受動的な大衆に加えて、自分たちの取り巻きや使者に出遭うだけでなく、合法的で独立した要素、つまりポーランドの独立への意志を現すものとも出遭うはずだ――我々はそのように考えた。同じことがワルシャワでも起こるはずだった。

J. M. C.:ということは、第三巻『国内軍』の580頁に記されているように、「ソ連に最小の軍事協力をすることで、彼らには逆に政治的な困難を負わせる」ということだったのか。

T. P.：ソ連が我々を抹消しようとしていたことは周知のことであったから、我々は政治的困難を負わせたことになる。ポーランド側は、独立国家でありたいとする自らの意志を強調したいと思った。ソ連が大西洋憲章の原則を守り、その義務を履行するのではないか、との希望があった。もしソ連が我々を承認するのであれば、それは結

構なことであった。もしそうでなければ、我々の逮捕に出るであろう、しかも秘密裏にではなく公然と。歴史的にこれは変わることがない。

J. M. C.：その場合、西側が抗議すると思っていたのか。

T. P.：そうだ。他に何が考えられるか。西側に寄せる我々の信用の表れであろうか。そうだ、と認めなければならない。西側にはまだなんらかの重みと力がある、と我々は信じていた。

J. M. C.：AK 総司令官から軍最高司令官に宛てた、「共産主義者らは、ソ連軍が中央ポーランドに入るや、国内で新政府の発足を宣言するつもりでいる」と記した電報が存在する。蜂起はソ連に対してそれを不可能にするための試みだったと見なしてもよいか。

T. P.：現場にいて、我らが軍事目的とイデオロギー的原理を示威し、敵の脅威を前に戦場から退却はしない――我々にはそうした傾向があった。AK が軍事組織であったことは記憶しておきたい。脅威を受けても重要地点を放棄すべきではない。国家はソ連に占領される征服されても、乗っ取られてはならない――我々の精神にはそのように刻み込まれていた。

J. M. C.：1943年以降、KG AK は、決定的な行動・作戦を起こすことによってのみ成果が挙げられると考えていたように私には思える。行動を起こさないことは理念的・政治的自殺行為であると。

T. P.：我々に問題だったのは、政治的に純粋な立場だった。もし我々が現状維持できないのであるならば、良き名前は保たなければならない。我々は価値、精神的要素を守りたかった。もし物質的要素が保てないのであるならば。

J. M. C.：ワルシャワ戦の決定に際し、イデオロギー的見地が勝ったと、貴殿は一度ならず述べたことはないか。

T. P.：イデオロギー的見地は極めて重要だった。これはまた政治的目的である、しかも極めて具体的な――中心的要求だった。イデオロギーと政治的活動だ。チャーチルは、もしドイツの攻撃はあった場合には、武器なしでも徹底抗戦する、と言った。英国民のイデオロギー的見解を述べた言葉だ。

J. M. C.：「嵐」作戦とワルシャワ蜂起は、ソ連に向けられた政治的行動であったのか。

T. P.：違う。それはそのように定義し、そのようなテーゼを広めていたが。我々がソ連との戦闘を決めたかのように関心をずらすことは誤りだ。攻撃的なのは彼らであって、我々ではない。彼らには一貫したものがない。彼らのテーゼに従うことはできない。パリ解放の際、西側ではこのようなことはなかった。

J. M. C.：グロト＝ロヴェツキとシコルスキの間の、そしてブル＝コモロフスキとソスンコフスキ間のすべての電報は、ソ連が攻撃的な姿勢に出たならば、AK は自衛することを伝えている。

T. P.：そのとおりだ。侵略者しだいだった。二つの敵を想定した理論は愚かだとソ連は見ていた。ポーランドにおける「二つに敵」論は、我々［AK］が考えたことではなく、我々の歴史であり、我々のこの問題への対応だ。共産主義者は1939－41年の時期でさえポーランドにとって好機だったと見ている。彼らの見解はこうだ。「ポーランドは対独でソ連と同盟を組むことに同意しないのだから、自身の安全を確保し、ドイツの攻撃の足場を取り除かなければならない」。

J. M. C.：AK の対独戦は、スターリンに脅かされた独立を守るための試みだったのか。

T. P.：ちがう。

J. M. C.：つまり、ソ連に抵抗するために、ドイツと戦う必要があったということか。換言すれば、AK は対独戦を遂行することで政治的には、モスクワに脅された独立を死守したということか。

T. P.：そうだ。ドイツとは戦争の初めから国内外で敵対関係にあった。我々の同盟国もまたドイツに対して戦っていた。我々は最後まで対独戦を続けた。これは単純な問題だ。ソ連問題は極めて複雑だ。我々の独立を脅かすソ連に関して言えば、独立は守らなければならないというのが我々の姿勢だ。ドイツと戦うことで、AK はソ連に脅かされていた独立を守ったのであった。もしモスクワが我々の同盟者であったならば、これほど大規模な蜂起とはならなかったであろう。もしソ連軍が別の形態で越境してきたならば、ワルシャワ蜂起のような軍事行為をあのような条件下で行うことはなかっただろう。

J. M. C.：ソ連の敵意が大きければ大きいほど、AK の姿勢を示威するための犠牲は大きくなったということか。分割と蜂起の歴史に範を求めるだけでは十分ではなかったのか。ソ連軍がポーランド政府との事前協議を経ず越境してきたならば、シコルスキ将軍は1939年時の国境を前提に軍事姿勢に入ることを望んだ。これには、ヴィルノとルヴフの掌握が入る。反共はここでは問題になっていなかったのではなかろうか。侵略者としてのソ連に抗するこ

とが問題であり、その性格は問題になっていなかったのでは。

T. P.：そのとおりだ。我々はロシアの征服者としての傾向に抵抗したのだ。

J. M. C.：将来のポーランドの体制が明確に示されていなかったことは、貴殿も認めていただけるか。

T. P.：認める。時間もかかる重労働だ。とはいえ、四月憲法から離れ、民主主義体制の樹立と広範な社会制度改革のために、一連の法整備を行う考えであった。体制を固める過程では、強力な政党に立脚した強力な政府を発足させることも考えていた。

J. M. C.：ワルシャワ蜂起は我々の蜂起の伝統と結びつけるための試みだったのか。

T. P.：そのようなことは計画になかった。ある局面は繰り返され、蜂起の伝統は民族に根を降ろした。このことは我々の作戦の遂行を容易にした。

J. M. C.：蜂起前の KG AK 作戦会議において、「ブル」将軍をスクシネツキの優柔不断さになぞらえて非難することがあったか。

T. P.：あった。ジェペツキがそのような非難をしていた。「ブル」に、「始められたし。さもなければ、第二のスクシネツキになる」と言っていた。

J. M. C.：蜂起は政府と地下当局のための「住民投票」のようなものとなるはずだったのか。

T. P.：そのようなものは必要としなかった。

J. M. C.：ズィグムント・ベルリンク将軍は脱走兵としての扱いになるのか。

T. P.：ベルリンクがもし密かに駐ソ・ポーランド軍を抜け出ていたとすれば、脱走兵だ。もし公然と抜け出ていても、ポーランド軍での貢献があったり、あるいは軍に残っていたならば、脱走兵とはならない。

J. M. C.：AK の武装闘争が社会改革と結び付けられたのはなぜか。

J. M. C.：AK の急進派への動きがあり、それを把握することが問題だった。さらに、急進派を否定することは共産主義者のプロパガンダに利用される恐れがあった。しかし、このことは簡単に扱うべきではない。「ブル」将軍は、もし社会改革を訴えなければ、大衆が PPR側に流れるだろう、と記した電報があるが、それが手っ取り早い説明になるだろう。

J. M. C.：社会の雰囲気や態度はワルシャワをめぐる戦闘決定に影響したか。

T. P.：それはない。決定的だったのは、1944年７月の前線の状況と展開だ。

J. M. C.：KG AK はワルシャワ戦に入る前、その可能性をどう見ていたのか。

T. P.：私は、戦闘は長くならないと思っていた。ワルシャワを早期に制圧することはソ連の関心事だと考えたからだ。前線の状況からは、赤軍が東部左翼から前線を襲いワルシャワを掌握するであろうと判断できた。私は、このことは戦闘開始の現実的条件であると判断し、戦闘が長期化しないと思ったのだ。緒戦で我々はドイツ軍の守りが手薄な場所の大部分を手中に収めるものと予想した。続く戦闘はドイツ軍の守りの堅い場所をめぐる攻防になるはずだった。私は、我が軍は多勢で、士気も高く、市民の反応や地政学的条件から見ても好条件が揃っていると判断した。ただ、武装化は不十分だった。

J. M. C.：貴殿はワルシャワ近郊のドイツ軍をどう見ていたのか。

T. P.：第三巻にあるとおりだ。

J. M. C.：KG AK は赤軍が最初の攻撃でワルシャワを制圧すると思っていたのか。

T. P.：必ずしもそうではないが、それでもワルシャワは前線からの攻撃、あるいはワルシャワから50キロの位置にあるマグヌシェフ近郊の橋頭堡からの攻撃で、数日で制圧されるはずであった。

J. M. C.：貴殿は、警察的な性格を持つ戦闘、たとえば1918年時のような戦闘を想像していたのか、それとも激しい戦闘になると予想していたのか。

T. P.：戦闘になるものと思っていた。今になってソ連は、KG AK は1918年時のような状態を考えていたと言っているが。

J. M. C.：KG AK はドイツ軍が防衛に入る可能性を考慮していたか、それともソ連の一撃で撤収すると思っていたのか。

T. P.：その両方の可能性を考慮に入れていた。ヴィスワ川はソ連にとって天然の障壁であり、ドイツにとってはプラス材料だった。

J. M. C.：貴殿にとって、２つの可能性のうち、重きをなしていたのはどちらか。

T. P.：わからないから、答えられない。しかし、ソ連が政治的・軍事的理由かワルシャワを押さえるものと確信していた。

J. M. C.：赤軍がワルシャワを支配し、我が軍の解体を始めたならば、どうなっただろうか。

T. P.：その点は十分考慮された。しかし、計画という形にまではならなかった。その場合には、我が軍の一部が抗戦することになると我々は考えた。

J. M. C.：武器・弾薬の不足について、貴殿はどのように考えていたか。部隊に補給ができ、戦闘が可能になったであろうか。

T. P.：事実がその質問に答えている。

J. M. C.：KG AK は緒戦で武器・弾薬が［戦利品として］得られると思っていたのか。

T. P.：そうだ。

J. M. C.：戦闘中の空輸はどうか。

T. P.：それはない。主たる武器供給源は敵からになるはずであった。我々は武器を欠いていた。

J. M. C.：ワルシャワに落下傘部隊がやってくることは計算に入れていたか。

T. P.：望んではいたが、大きな期待は抱いていなかった。

J. M. C.：落下傘部隊がワルシャワ救援にやってくる事態は、作戦的に戦略的にも検討されていなかったのか。

T. P.：いなかった。

J. M. C.：蜂起に対する空中支援はどうか。

T. P.：計算に入れていた。南イタリアからの空輸の時期だった。夜が短く、空輸はピリツァ川どまりだった。ワルシャワでの戦闘が飛行延長につながるものと信じた。夜は日増しに長くなっていたのだから。

J. M. C.：当初は、ドイツ軍の陣地に対する空爆も望んでいたのではないのか。

T. P.：そのような保証はなかった。戦闘は極めて重要だったから、あらゆる支援を期待した。それは、国内での作戦にとっていつでも予測されていた。

J. M. C.：ワルシャワ戦が失敗に終わる事態を、貴殿は考えに入れていたか。

T. P.：入れていたと言えるだろう。７月31日に、ヤンコフスキが、もしモスクワの一味がワルシャワに入らなかったら、どうなるのかと訊いたとき、自分は、ドイツ軍が我々を袋叩きにするだろう、しかも直ちに、と答えたのだから。

J. M. C.：「モンテル」の報告は8月1日の作戦開始にどのような影響を持ったか。

T. P.：極めて大きかった。「モンテル」は２つの重大な決定に大きな影響があった。「W」時間を夜間から17時に変更したことと、８月１日に蜂起を実施する件でだ。「モンテル」は最後の報告で、ドイツ軍橋頭堡が破壊され、赤軍がプラガ地区端に攻撃をしかけ、赤軍の戦車がプラガ近郊に迫っていると伝えた。

J. M. C.：「モンテル」はそれを自身で見たのか。

T. P.：ちがう。彼はこの情報を持ち込み、作戦を開始しなければならないと確信していた。十数時間後にはモスクワ一派がやってくるものと思っていた。

J. M. C.：「モンテル」の報告は誇張されていないか。事実に符合していたのか。

T. P.：誇張はない。７月31日にドイツ第73師団長とその参謀部が捕虜に取られたこと、赤軍がプラガの目前まで迫っていたことは、今ではソ連側の史料から明らかになっている。「モンテル」は捏造していない。

J. M. C.：しかし、のちにイラネク＝オスメツキ大佐がやってきて、異なる報告をしていた。

T. P.：イラネクの先の報告は赤軍に関するものだった。イラネクが８月31日に［ワルシャワ戦の翌日の開始の］決定後、「モンテル」が退出後に、どのような情報をもたらしか、彼に訊いてみるとよい。

J. M. C.：イラネク＝オスメツキ大佐は、ドイツ軍橋頭堡は維持され、「ヘルマン・ゲーリング」師団が現れた、と報告している。

T. P.：「モンテル」の報告は戦略的に現状に近く、また重要だった。彼は現場にいた指揮官であり、状況把握が的確にできた。第二部長の情報源はもっと拡散したものだった。

J. M. C.：ボクシュチャニン大佐が貴殿と最後に会ったのはいつか。

T. P.：覚えていない。ボクシュチャニンに手紙を書かれるとよい。

J. M. C.：解放されるワルシャワにあらかじめ政府代表に文民行政機関を発足させる件はどうなったのか。

T. P.：「ブル」将軍が政府代表と話をした。「ブル」に訊かれたい。
J. M. C.：インタヴューに応じていただき、お礼申し上げる。